

氏名 錢 国 紅

学位（専攻分野） 博士（学術）

学位記番号 総研大甲第165号

学位授与の日付 平成8年3月21日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻
学位規則第4条第1項該当

学位論文題目 世界像の形成 - 徳川日本と中国

論文審査委員 主査 助教授 白 幡 洋三郎
教授 石 井 紫 郎
教授 依 田 憲 家（早稲田大学）

日本はアジアで一番早く近代化を成し遂げた国であるが、この近代化を世界史上、どう位置づけるべきかは広く議論されてきた問題である。多くの研究者は、この近代化の過程を西洋の衝撃と日本の対応として論じてきた。しかし最近では人々はそのような研究に一つの大きな落とし穴があると気づき始めている。つまりそれは近代という時代を過度に美化して、近代以前を暗黒視するという点である。こうした近代と近代以前を断絶して考える傾向は、近代以前につちかわれた土台を軽視して、西洋文明という外来の刺激を日本の近代化への唯一の原動力と考えてしまう恐れがある。私自身もこれは日本の近代化の歴史の実際に合っていないのではないかと前から素朴な疑問を感じてきた。

この問いを解くために、私は日本人がどのように近代的世界像を身に付けてきたかという問題を近代化の原点に立ち戻って再考察する必要があると考える。西洋を含めた近代の世界像がどのようにして日本人の思索に根づいてきたかを跡付けることによって、より直接に、しかもより深く近代化以前とその途上の日本人の思想状況を見ることが出来るからである。これが『世界像の形成—徳川日本と中国』というテーマを構想したそもそもの理由であった。

本論文は近世日本における世界像の形成を中国を始めとするアジアとの連動において捉え、近代以前の日本における「世界意識」の芽生えとその成長ぶりを、蘭学者等の知識人の思想や行動等を通じて分析したものである。特に十九世紀後半、幕末については、日本知識人が中国知識人の獲得した世界的視野や情報から刺激を受けながら、如何に積極的に自国なりのさらに新しい世界像を構築していったかを明らかにする。

明治時代にいたるまで、長い間日本知識人は中国の書籍を通じて世界を見てきた。中国経由の世界像を、西洋人宣教師やオランダ人たちが伝えた世界情報とつき合わせながら、それらを比較し批判して、より真実に近い世界像に辿りつこうと努めてきたのである。こうした世界像への道程には、西洋の刺激だけでは解釈し切れないものがある。本論文は日本における新たな世界像の形成に対して、西洋の刺激のみならず、多元的なアジアの知的或いは文明的刺激もまた重要な役割を果たしていた事実を明らかにし、近代世界を迎える日本の真の姿を見つめ、さらに徳川日本と中国、また世界との関係を究明することを目指す。これは世界における日本という存在の本当の意味への解明につながるものと考えている。

上述の問題意識と視点が、本研究の構成や研究内容を基本的に規定する。本研究では三つの部分に分けて上述の研究課題に取り組むことにした。一つは従来狭い意味での「世界」が、新しい「世界」へと移り変わる過程において、日本と中国の知識人達はどのようにして自らの世界像を確立し、展開していったかを見た。

これについては、まず東西文明の交流に携わったカトリック宣教師達のことを考える必要がある。具体的にいうと、中国では明朝のマテオ・リッチ作成の世界地図とその影響、日本では十六・七世紀のポルトガル人宣教師による世界地理啓蒙活動や中国からの書籍による影響などを取り上げた。さらに日本では、早くから北方への探検を通じて、ロシアについての知識などを獲得し、蘭学系由来するまだ半ば想像的な、書物的な世界像と現実の世界とを対照せねばならぬことを知った。人々はこうして、様々な知的探検や学問的研究を重ね、世界的視野を広げることにより、自分たちの空間的・地理的世界像や観念的・価

値観的世界像に変化を徐々に与えていったのである。

空間的世界像と観念的世界像がいつも一致するとは限らない。知識人は人間世界のあるべき姿に対する強い欲求を持っているために、新しく伝わってきたものに対してつねに好奇的で、貪欲であると同時に、また批判的、懐疑的にもなる。故に視野の拡大に伴い、彼らは在来の価値に反省と反発を示したり、新来の価値に躊躇と矛盾を感じたりする。しかしそのような錯綜した思想状況に敢えて入り込んでゆくとき、彼らは、初めて東西文明の対話を実行したと評価しうる。ここに十九世紀とその前後における中日両国の知識人の共通点が見られる。故に私は両国知識人において世界視野の拡大と共に生じた観念的世界像のぶつかり合い、それによる喜びや苦悶或いは深い思索にも注目した。この観念的世界像の再構築の過程にこそ、東西文明の対決を通じた東洋人の主体性が初めて見えてくるからであり、これまで洋学系の知識人を見る時、このような観念的世界像の相克とその克服の努力があまりにも無視されてきたと思うからである。

こうして第二部では徳川後期の日本知識人の西洋に対する精神的な繋がりや緊張を跡付けた。この部分では、世界的視野の成立に寄与する新井白石と西洋人宣教師との対話を始めとして、地理的・空間的世界像を新たに学び、それを検証し、その世界像の担う価値を自国に現実化しようと努めた人たちを取り上げた。例えば前野良沢、本多利明、司馬江漢等がそうである。また十九世紀に入ると、一層広く深い世界知識を持ったために、新しい世界に対する憧憬よりもむしろ畏怖の念が強くなり、それに対応すべき自国の現状についても苦悶し、批判を強める一群が出現した。その代表的人物として杉田玄白、高野長英、渡辺華山などが挙げられる。さらに山村才助、箕作阮甫などは新井白石以来の世界地理の伝統を受け継ぎながら、西洋の最新情報や新たに中国から伝来した漢籍世界地理書を速やかに吸収し、全面的に幕末の世界認識を刷新した。それは幕末の対外危機の回避に応用できたばかりでなく、近代日本の世界史や世界地理学の先駆をも成していたのである。一方、洋学以外の学問分野も世界とのつながりを視野にいれながら、自らの思想体系を再構築していく人物が見え始めた。町人学者山片蟠桃、国学者平田篤胤、儒者会沢正志斎等がその典型を示している。

さらに第三部では十九世紀の中国を始めとするアジアとの連動において、幕末日本における新しい世界像の形成の特質を見る。ここでは佐久間象山のような大きな思想の転換を象徴する人物が登場する。象山の「世界のなかの日本」の構想と魏源の新たな世界意識との関わり等について分析し、両国の知識人の思想状況の異同を考えてみた。象山は「東洋道徳と西洋芸術」の両立と統一を公然と主張し、当時の日本の知識層に波紋を投げかけたが、これはいわば世界における日本（東洋）の自覚の成熟の表れであり、西洋の科学的合理主義と日本的主体性の統合が一層明確に意識された証拠である。世界のなかの日本を巡る象山の発想は、この時代の日本人がもった世界意識の本質、或いは到達点を示すと思われる。

佐久間象山のような幕末の志士たちが、中国のアヘン戦争を省みて新たな世界像を模索した魏源の『海国図志』等と出会ったことは、まさに幕末日本の転機を作るきっかけとなった。アメリカ人からの黒船の到来の前に、既にロシアの南下とイギリスの日本への動向に絶えず敏感に反応してきた日本人にとっては、アヘン戦争の教訓は決して他人事ではなかった。アヘン戦争を背景に著された魏源の世界地理書『海国図志』は、こうした危機に

打開の指標を与えるものとして幕末日本に受け入れられたのである。

日本人は、ロシア、イギリスに加えてアメリカという新たな大国にも目を向けようとするまさにその時、すなわちペリー来航の二年前である一八五一年に、西洋諸国とアメリカを詳しく叙述する『海国図志』にはじめて出会った。その意味は大きかった。これによって日本知識人の世界意識は一段と高められ、西洋世界への現実的な理解と対応に道を開かれた。現実的危険に曝されながら世界への旅を敢行しようとした志士吉田松陰の渡海の試みから、幾たびかの「大君の使節」（一八六〇～一八六七）や留学生たちの時代に至ると、世界に連なろうとする志向が日本の激変をもたらし、実際に自分の目で西洋を見、現場に学ぶことを通して、西洋世界の新しい意味、西洋を含めた世界の実像が次々に再発見されていった。アメリカと出会った福沢諭吉は強烈な文化ショックを受けながら、そのなかから一つの新しい文明像を日本人に将来した。それは同時に新しい世界における新しい日本の新しい位置づけの試みでもあった。

一方、十九世紀中国の知識人たちも世界像の拡大を経験した。魏源を初めとして洋務派や改良派などの指導者たちは次々と西洋世界に目を向け、地理的世界のみならず、精神的にも西洋世界との接点を探し、独自の世界への参画の道を歩み始めようとした。「天下」から「世界」への世界像の変遷を捉えるために、人々は古代中国の大同理想に思いを馳る一方で、中国思想の永い停滞に西洋世界の刺激を注入し、重い自己中心的世界像からの脱出の旅に出発した。そのような模索は、世界の意味、世界における中国のあり方に対する切実な問いとして、中国独自の新しい世界像の展開を促すものであった。その探索の軌跡は十九世紀中葉に既にアメリカ文明を中国に持ち込もうとする容闳の「少年留学生派遣計画」や、他に先駆けてヨーロッパ等を見回った清末の官僚知識人・張徳彝の新しい西洋文明像に見出すことができる。西洋諸国との外交折衝に取り組んだ清末の官僚知識人たちは、ヨーロッパに赴く船の中で、或いはパリ・コミューンの最中で、或いはそこから帰りの船で、思いがけずに新生日本の遣欧使節たちや留学生たちと巡り合っ、それを契機に近代中国の「日本再発見」を始めたのも興味深い一幕であった。

こうして本論文は十八世紀初頭から十九世紀後半に至る日本と中国の知識人たちが、勇気を振るい、戸惑いを抱きながら、相前後して近代社会に入るためにそれぞれ独自の世界像を持つにいたった歴史とその意味を考察してきた。十九世紀半ばまで、西洋という存在を文明として認めなかった中国と、その百年も前から既に、積極的に西洋への知的な旅を始めていた日本。アジアとヨーロッパとを長い間眺め、比較した上で、後者を新文明のメッカと仰いで国作りの手本にした日本と、自国文明を相対化すると同時に自国に照らして西洋文明をも相対化し、この思想態度を実践しようとした中国。本研究に示された近代化における中日両国の知識人の対照には、非西洋社会である両国にとっての近代化とは何であったか、また両国におけるその共通性と差異を語るものが十分に含まれていると信ずる。

(論文審査結果)

本論文は、日本の近代化の特徴を、それ以前に準備されていた近世日本における世界像の形成という視点から、アジアとの関連、特に中国との比較において浮き彫りにしようとしたものである。西洋文明という外来の刺激を近代化への唯一の原動力ととらえる、従来の日本の近代化論に多く見られる姿勢をとらず、近代以前の日本における世界認識の成長のなかに歴史を動かす力を求めたところに新しさがある。

16・7世紀のポルトガル人宣教師による世界地理啓蒙活動によって、世界への眼を開かれた近世日本の知識人世界が、北方への探検を通じて獲得した実体験を含むロシア認識と、中国経由で日本にもたらされた漢訳の洋書、ならびに直接日本に入った西洋地理書の読解、それとの格闘という知的営為を通じて、現実の世界を実体と観念の双方からとらえる新しい「世界像」をつくりあげてゆく。その経過を、新井白石の西洋人宣教師との対話から、江戸後期の前野良沢・本多利明・高野長英・山村才助、幕末の佐久間象山らの西洋文明理解まで広く視野におさめて、丹念に跡づけている。

外来の学問のたんなる受容として描かれることが多かった蘭学・洋学という日本の西洋研究のなかに、じつは「実学」を基礎として西洋の学問の方法を確実に身につけてゆく強さと深さがあった。その点を明末以来の「中華」の国における海外認識の歴史とたえず対比していることも従来にない一見識であろう。こうして日本・中国における地理的世界認識の展開を一貫して、それぞれの国における自国文化批判と自己変革のための思想運動として考察しなしたところに、本論文の卓抜な新しさがある。それによって日中比較文化史へのこれまでにない見方を提出したが、これは分析手法の的確さをも示している。

また、中国の知識人がつくりあげた世界像と日本の知識人がつくりあげたそれとの比較の中から両者の知的サークルの性格の違い、知識人社会の構造の差異を示唆する成果が見られ、つぎのテーマへの発展も期待しうる論文である。参考資料の扱いは周到であり、引用漢文にも丁寧な読み下し、あるいはその翻訳がつけられている。研究対象となる資料を十分に消化した上での論文作成が伺える。

資料上の新しい発見は、必ずしも見られないが、歴史的事実の個別認識に拘泥することを避け、19世紀のアジアにおける新しい文明の秩序の形成を大きな流れとしてとらえた歴史論文としての高い達成が見られ、博士論文として学位を授与するにふさわしい。